

令和2年度大阪大学秋季卒業式・大学院学位記授与式 総長式辞

本日、大阪大学から、新たな一歩を踏み出さんとしている皆さん。大阪大学を代表し、心からお祝いを申し上げます。

また、この日まで長きにわたり、皆さんの勉学と研究を支えてこられたご家族の方々には、敬意を表しますと同時に、衷心よりお喜び申し上げます。

特に留学生の皆さんにとっては、母国を離れ、言葉や文化、生活環境が異なる日本で学業を修めることは、並大抵のことではなかったでしょう。それを見事に成し遂げられた皆さんの強い精神力、そして異文化に対して協調していく能力の高さは本学の大きな誇りとするところです。

今年に入って、世界的に猛威を振るっている新型コロナウイルス感染症。この、生物とも無生物ともいえぬ、得体の知れないウイルスによって、私たちの生きる社会は急激な変化を余儀なくされました。

本来であれば、本日は、東京オリンピック・パラリンピックの歓喜の余韻の中で、皆さんの新たな門出を手放しに祝うことができたはずでした。しかし、そのような状況でないのみならず、皆さんは、心のどこかで周囲を気にしたり、あるいは、将来に漠然とした戸惑いを感じつつ過ごしていたりするのではないのでしょうか。皆さんが、この大阪大学で過ごした最後の数か月に、心残りや何か物足りなさを感じておられるのではないかと案じております。

日本で最初の新型コロナウイルス感染症の患者が確認されたのが、本年1月16日でした。それ以来、ニュースでは、大阪の、そして全国の新規感染者数、重症患者数、クラスターの発生数を知らせています。私たちは、毎日これらの数字に注目し、そしてこれらの数字とともに生活をしてきました。

数字は、説得力を持ちます。そして、数字には普遍性があります。しかしその性質ゆえに、その数字が具体的に提示されると、私たちは全てを知った気になってしまい、その奥にある本質や現実を見失いがちです。

皆さんは、次のような言葉を聞いたことがあるでしょうか。

『一人の死、それは悲劇だ。しかし百万人の死は統計だ！』※1

歴史上では、このようなあまりにも恐ろしく、人間性を欠いた言葉が用いられた時代がありました。

私たちも、日々発表される新型コロナウイルスの新規感染者情報を、「昨日と比べて減った」とか、「日本では、感染者数に比べて死者数が相対的に低い」といった視点で数字を受けとめてしまっていないでしょうか。しかし、その数字は、言うまでも無く感染で苦しんでいる人たちやお亡くなりになった方たちを示す、悲惨な現実を表す数字です。そして、その数字の背景や周りには、多種多様な人たちが存在するのです。

医療の最前線で自分への感染の危険を認識しつつも懸命に従事する人たち。近親者のあまりにも突然の死に唯々茫然と立ちつくしている人たち。また、PCR 検査で陽性になって底知れぬ不安を抱いている人たち。さらには、その感染者を心配する家族や友達です。

一方で、この新型コロナウイルス感染症により、経済活動にも影響が出ており、失業率が悪化しております。

ある研究では、日本では失業率が1%高まると、自殺する人が年間約2000人増えるといわれています。ニュースでは、失業率について数パーセントという数字のみが示されますが、その数パーセントの背景には、路頭に迷い、明日への希望が見出せず苦しんでいる人々がいる。そのような現実には、なかなか想像が追いついていないのではないでしょうか。

ここで、私から皆さんへのひとつ目のお願いです。

これから、皆さんは、社会に羽ばたき、社会人としてさまざまな道を歩むことになります。その時に「提示された数字の背景で、人々はどのような状況にあるのだろうか」ということを、常に考えることができる人間になってほしいということです。

2004年に大阪大学は、創設以来の精神を受け継ぎ、将来の豊かな発展を期し、自らの基本理念として「大阪大学憲章」を宣言しました。今、皆さんにお願いしましたことは、この憲章で示している次の言葉に集約されています。

『大阪大学は、人間そのものや人間が構成する様々な社会、及びそれを取り巻く環境や自然のあらゆる分野について、また、それら相互の関係について、その真理を探究し、世界最先端の学術研究の場となることをめざす。』

このことを実践することにほかなりません。どうか、いかなる時も、数字が示すその本質を見抜き、真理を見出す想像力を最大限に発揮できる社会人になってください。

次に、私から皆さんへのふたつ目のお願いです。

先日、現代アートの分野で世界的に活躍されており、本学の特任教授でもある森村泰昌さんのオンライン講義を受講しました。現在、文化・芸術の分野もまた、新型コロナウイルス感染症によって、大きな影響を受けています。その講義の中で、森村さんは、1930年代の世界大恐慌時代のアメリカで行われた文化政策を例に挙げて、「国家主導の文化政策には弊害があるものです」とおっしゃっていました。

恐慌のもとで、市民は文化・芸術を堪能する余裕がなくなります。そこで、国家が画家や音楽家、写真家に仕事を与えます。当初はその政策によって、活力を取り戻したかのように見えた芸術家集団も、国家との軋轢が生まれます。それは、「お金は出すが口は出さない」という鉄則を国が守れなくなり、芸術家としての表現の自由に制約がかかったからではないか、と森村さんが教えてくださいました。

芸術家には、芸術家の信念がある。その信念を曲げてまで、国家の求める仕事はできない。ということでしょう。

この話をうかがったとき、私は大阪大学の源流である適塾出身者の長与専齋の逸話を思い出しました。長与専齋は、日本に「公衆衛生」という言葉を定着させた人物です。

今から、100年以上前の1880年代の日本では、明治維新によって近代化を迎えたものの、たびたび伝染病が猛威を振るいました。当時の日本政府は、「感染者が出た家の門には、そのことを示す張り紙をするべき」ということを検討し、警察の管轄下で伝染病の抑止を進めましたが、長与はそのような強圧的な政策に疑問を呈しました。「伝染病は権力や圧力で収束させることはできない。収束には市民の理解と協力が不可欠である。」と説き続け、強権的な方法ではなく、各自治体に「衛生委員」という市民目線の組織を作り、上下水道の整備や港での感染の流行を予防する、いわゆる防疫などを整備しました。

長与は、自らの信念に基づき、伝染病抑圧のために必要なことを見出し、専門家の視点から、意見を述べ、つぎつぎに政策へと結び付けていきました。長与がとったそれら方策は、今でも日本に根付いており、わが国の市民の衛生意識を高めている要因の一つと考えられています。この長与の生き方も、大阪大学憲章に示されている次の言葉に集約することができます。

『大阪大学は、教育研究の両面において、懐徳堂・適塾以来の自由で闊達な市民的

性格と批判精神やその市民性を継承し、発展させる。学問の本質を踏まえ、いかなる権力にも権威にもおもねることなく、自主独立の気概のもとに展開する。』

皆さんは、大阪大学で学んだ教養と専門性を存分に社会に役立てることが要請されていることを常に意識してください。その実践の過程は、順風ばかりでなく、しばしば逆風の時もあるでしょうが、自分の言葉で自分の考えを伝え、自らの責任においてその主張を貫いてください。いかなる時にも、自主独立の気概を持ち続けてください。

最後に、私の好きな言葉を皆さんに贈ります。

本気にすれば

大ていな事は出来る。

本気ですれば

なんでも面白い。

本気でして居ると

誰かゞ助てくれる。

人間を幸福にするために

本気で働いて居る人間は

みんな幸福で

みんなえらい。※2

ポストコロナ・ウィズコロナ時代と言われている中、私たちは、この小さなウイルスに振り回されることなく、一人ひとりが自ら前向きに考えながら生きていくことが大切です。それは、日々の生活をさらに良いものにするためにも、また日々の幸せをさらに強く感じられるようにするためにも必要なことなのです。ワクチンや特効薬の開発といった医薬分野だけでなく、新しい日常生活のあり方、コミュニケーションのあり方、家族のあり方をはじめ、さまざまな分野で、新たなアイデアが求められています。本学を卒業される皆さんが、本気になってそれらに立ち向っていかれることを強く願っています。

5年後に開催される大阪・関西万博のテーマは、「いのち輝く未来社会のデザイン」です。皆さんが、皆さんの手で作り上げる、未来社会はどのようなものでしょうか。皆さんが笑顔で、家族や友達と幸せに過ごすことができる、輝ける社会が到来するこ

とを心より念じております。

改めて、本日は誠におめでとうございます。

令和2年9月25日
大阪大学総長
西尾 章治郎

(※¹は、クルト・トゥホルスキー(1890-1935)の言葉から引用いたしました。)

(※²は、後藤静香「権威」(希望社出版部、1927年)から引用いたしました。)